

平成 16 年 9 月 30 日

佐々木 朗

## 28 回目の献血

何度も献血ルームの周りを回って

「平成元年 4 月 4 日」消えかけているスタンプでかすかにわかる。大通りにある献血ルームを初めて訪れた日である。当時、私は静内町立桜丘小学校に勤務しており、春休みの会議日をぬって札幌に本の買出しに行った日である。静内にも本屋はあるが、毎年心新たにということで、思い切って札幌まで出て、紀伊国屋や旭屋などの大きな書店に寄って、本をどっさり仕入れて来るのが、静内に勤めていた時の毎年の常であった。

大通り公園のちょうど真下にあるオーロラタウンの一番はじのテレビ塔寄りに、大通り献血ルームがある。「私の血液が少しでも困った人のために」という崇高な考えがなかったわけではないが、いつもは紀伊国屋の行き帰りに素通りするコースである。その日は、たまたま血液が相当に足りなかったのか、いつもそうしているのかわからないが、職員が「A 型が不足しています。ご協力お願いします。」と街行く人々に大きな声で呼びかけている。ちょっと心が動いたが、針を刺されて血を抜かれると思うと、わざわざ今痛い思いをすることがない。ということで一度通り過ぎたが、また、ぐるりと回って戻って来てしまった。献血ルームの向かいには NTT があり、ロッテリアがあり、その反対側の通路につながっており、ぐるりと一周できるような所に位置している。「痛いぞ。何も自分が行かなくても、これだけ人がいるんだ。血液はきっと間に合う。」という自分と、「痛いったってたいしたことない。献血で死んだ人は聞いたことがない。何より人の役に立つことだ。ここは勇気を出して献血するべきだ。」という自分が、頭の中で戦いを始めた。なかなかこういう時に決断できないのが私であった。「もしかしたら、もう一度回ってみたら、血液が足りていて職員は中に入ったかもしれない。そうしたら、献血しないで済む。」などと密かに願いながら、もう一度献血ルームの方に近寄って見た。

まだ、職員は、通り行く人々に呼びかけている。私がすごく迷っていた。その時、職員さんと目が合ってしまった。今まで揺れていた気持ちであったことをおくびにも出さず、「当然です。」という顔をしながら、献血ルームに入った。お調子者である。

初めての献血ということであったが、スタッフは実に和やかに笑顔で接してくれた。中に入ってしまったからでは、もう引き返すなんてみっともないことはできない。というわけで、血液の適合の測定、そして、献血と両手に 2 回、ほんのちょっとだけチクツという思いをして私の初めての献血は無事終了した。

お金を入れなくても出てくる自動販売(?)機、バスケットに入ったチョコレート、優しいお姉さんの「ご気分は大丈夫ですか。」などに気分は、やり遂げた絶好調になりながら、献血ルームを後にした。帰る時、声をかけてくれた職員の方にもお礼を言われたが、名札を

見ると所長さんであった。ボスが自ら先頭を切って、声をかけていたのであった。

札幌のお決まりコースの一つに

消えかけた献血カードを見ると、平成2年1月、平成2年4月、7月、9月、11月といずれも大通り献血ルームのスタンプがある。さほどの使命感があったとは言えないが、何度かの献血を通して、職員さんとお話する中で、献血の大切さが自分なりに少しずつわかってきたような気がする。当時は200mlの献血だったので、札幌へ行っては献血ルームに立ち寄りというパターンが確立された。そして、平成3年1月9日の献血を最後に、私は、静内町の桜丘小学校から、恵山町立東光中学校へ転勤となり、以後みはら献血ルームへ通うことになるのである。

レフトロンが高値に

みはら献血ルームは長崎屋の中にあり、まあ、函館市民にとっては、お決まりの買い物コースに入っているところにあり、場所的にはいい場所である。恵山に転勤して（当時、私は、東光中学校向かいの教員住宅に住んでいた）週末に買い物に出た時に寄るコースになり、平成4年7月4日から、平成7年3月まで13回の献血を行った。献血は、また新たに血液を作る働きを活性化させることもあり、体にはいいことも知った。そんな中ではあったが、平成6年頃から、レフトロン（別な測定法ではGPT）の値が献血できる範囲ギリギリまで上がった。レフトロンとは、肝臓から出る酵素で、肝細胞が壊れると血液中に流れ出します。原因としては、肥満や飲酒、そして肝臓そのものに病気がある場合である。私の場合、全くお酒は飲まない。献血ルームのお医者さんは、あまり心配することはないと思うけど、食べ物に気をつけて、体重を減らしてみようにと、アドバイスをもらった。

ところが平成7年の3月の献血を最後に、平成13年までの間は、全く献血ができなくなった。前回にレフトロンの値が高かったり、中止になったりしていると、その場で簡単な検査をしてその数値を確かめるのである。自分では、適度に体を動かすことに気をつけて、肉もがまんして、「今度こそ」と思いながら、血液検査に挑戦したわけですが、いずれも門前払いの状況が続いた。

職員健康診断でも、GPTの値が指摘された。専門の医者に見てもらったところ、脂肪肝ということで、脂肪に油がついており、それが原因ではないかということ、いずれの肝炎もマイナス値ということで、薬によって、値を落としていました。もちろん自覚症状など全くなしではあった。

その後、職場が恵山から現在の藤城小学校に変わり、人間ドックで五稜郭病院に看てもらったことから、そこで3ヶ月に一度ぐらい血液検査を受けました。家では、肉料理が姿を消して、魚料理が多くなりました。年に何回か食べる「ハセスト」の焼き鳥弁当や、先生方でやる反省会などは、内緒ながら、肉をつまんだものであった。

その甲斐があったのか、定期健診でも GPT がある程度正常値に戻った。「よし、大丈夫」と思って、久しぶりにみはらの献血ルームに行き、「佐々木さん、大丈夫です。献血お願いします。」と言われたときは、とても嬉しかった。そのみはら献血ルームも財政上の理由から、2年ほど前に閉鎖になってしまい、現在は、日の出町の血液センターか、移動バスということになってしまった。

これからも、マイペースで献血を

みはら献血ルームが閉鎖された後、今は歯医者さんになっていますが、前を通ると、「今度こそは」と中に入る自分、「やっぱりダメか。」と思って出てくる自分、そして、「再び献血ができた。」ってニコツとする自分を見るような気がする。

買い物途中に、ということではできなくなりましたが、その後、長崎屋の前に献血バスが停まっていた時、そして、仕事で札幌に出かけた時、そして時間がある土曜日に血液センターに、と思いついたときに献血を続けている。

昨日は、そろそろ献血できる期間がたったかなあとカードを見て、センターの HP を見たら A 型がピンチと出ておりましたので、仕事が一段落して出かけた次第である。やはり血液が相当に足りないのか、中央病院の看護師さん達も交代で献血に来ていた。

献血は 16 歳から 69 歳までできるとのことである。ぜひうちの子ども達にも体験させたいと思っているし、若い高校生、大学生の皆さんも、ちょっとの勇気でできるボランティアである。私も健康に気をつけながら、3ヶ月後に、センターを訪れ、健康であることを確認したいと思う。

